

融和というマージナル

ードイツ移民ラップにおける「日本人」というエスニシティがもたらすものー

林 志津江（法政大学）

本発表では、ドイツ出身の日本人ラッパーBlumio（ブルーミオ／國吉史生、1985 生）の代表曲 *Hey, Mr. Nazi*（2009）を例に、ドイツにおけるヒップホップ、特に移民の出自を持つパフォーマーのエスニシティにおける「日本人」の独自性について考察する。

ドイツのヒップホップ（Deutschrap／ドイツ〔語〕ラップ）は1980年代、米軍基地を擁する旧西ドイツのハイデルベルクやフランクフルト（アムマイン）、シュトゥットガルト、次いでハンブルクやケルン、あるいはドルトムントのようなルール地方の諸都市から始まった。さらに再統一（1990年）を経た後の首都ベルリンで興ったシーンは「ストリートラップ」（Straßenrap）と呼ばれ現在に至るまで各地に広がっているが、その「ストリート」とは、第一義的にはドイツ最大の移民グループであり、ベルリンに大規模なコミュニティを形成しているトルコ系の人々の暗示であろう。興味深いのは、M.リュートが指摘するように、ドイツのヒップホップが、米国との繋がりや影響関係をヒップホップの真正性のイメージとして用いてきた一方で、まさにその真正性を担保する「ゲッター」や「暴力」「政治性」等々の概念が、ドイツの文脈においては「エスニック・マイノリティ」や「トルコ系」のイメージと容易く結びつくという、G.クラインとM.フリードリヒの指摘である。

他方、ドイツのヒップホップシーンでは、移民の出自を持つパフォーマーたちが、ギャングスタラップの本格的な受容者であると同時に、コンシャスラップの担い手としても認識されているというべきだろう。Blumioについても、ネオナチとの対話というコンセプトに始まり、2015年までに発表した4枚のオリジナルアルバム、2012年から2015年ごろまで続いた時事ニュースをラップにのせて歌う *Rap da News*（2012）などのプロジェクトは、コンシャスラッパーとしてのBlumioの姿を色濃く映し出している。

そしてBlumioが生まれ育ったデュッセルドルフは、日系企業が数多く進出する商業都市であり、大規模な日本人コミュニティを擁する。1980年代、ドイツで最初期にヒップホップシーンが形成されたケルンやルール地方とも地理的に近く、ヨーゼフ・ボイスやクラフトワークらが活動拠点とした知的な文化都市としての側面も持っている。しかし、あるいはそれゆえというべきか、その日本人コミュニティの歴史は、ドイツにおいても例外ではない「移民の統合と共生」の物語とは様相がやや異なるようだ。本発表の前提は、両親ともに日本人で現地校育ちの日独バイリンガルBlumioの出自が、ドイツのエスニシティとしては完全にマイノリティであるにも関わらず、「移民国家ドイツの移民ラップ」という文脈からは外れているという仮説である。本発表は楽曲の歌詞テキストの検討と併せ、ヒップホップとエスニシティをめぐる一つの話提供提供としたい。